

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	千葉県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	館山市立西岬小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8	15
児童数	15	23	22	23	19	24	4	130	

II 研究の概要

1. 研究主題

自ら問題意識を持ち、進んで学ぼうとする子をめざして
 一少人数指導による基礎・基本の定着を通して一

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

○全学年 算数・国語

○算数科学習設定の理由

- ・他の教科に比べて理解度や学習の進度に個人差が付きやすいため。
- ・児童の実態から、自ら解決しようとする意欲を育てたいため。
- ・基礎・基本を用いて解く（答えを出せる）ことで達成感を味わわせたいため。
- ・答えを出す過程を大事にしたり、それを説明させたりすることで論理的な思考ができるようにさせたいため。

○国語科学習設定の理由

- ・書くことの領域において、論理的な思考力としての「考える力」を伸ばし、思考力を育てるため。
- ・児童の実態から、発表したり、文章を書いたりして自分の考えを表現することに抵抗を示す児童もいるため。
- ・進んで自分の考えを表現できる子をめざすため。

(2) 年次ごとの計画

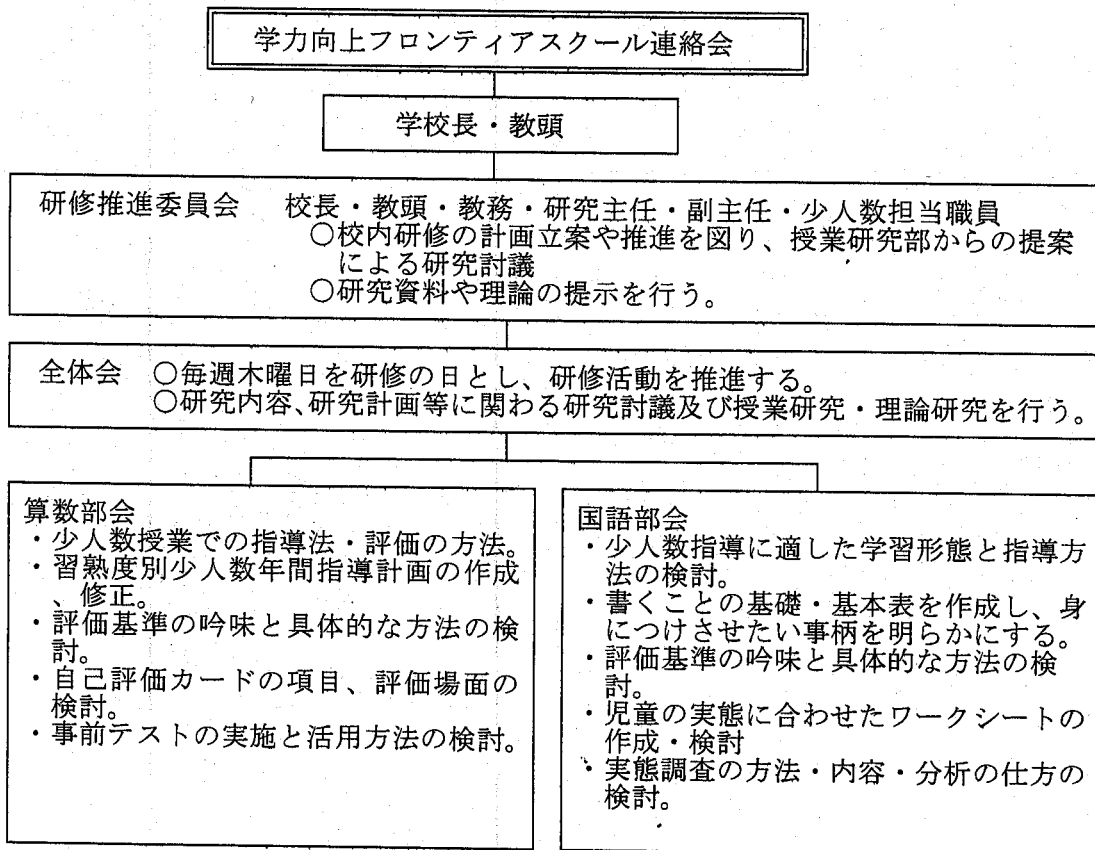
平成14年度	<p>○テーマ 自ら問題意識を持ち、進んで学ぼうとする子をめざして 一 基礎・基本の定着を図る算数指導の工夫 一</p> <p>○仮説1 個に応じた学習問題を工夫すれば、問題意識が高まり進んで学ぼうとする子になるだろう。 仮説2 個に応じたきめ細かな支援をすれば、学習意欲が高まり基礎・基本が定着するだろう。</p> <p>○ 研究の内容・方法 ・少人数指導（算数）のカリキュラムと指導体制について考える。 ・少人数授業での指導法・評価の方法を探る。 ・全学年が授業研究をし、仮説の検証をする。 ・習熟度別少人数年間指導計画を作成し、学習問題を修正する。</p>
--------	--

	<p>○テーマ 自ら問題意識を持ち、進んで学ぼうとする子をめざして 一少人数指導による基礎・基本の定着を通して一</p> <p>○<算数科の研究仮説> 学習の振り返りをする場や方法を工夫すれば、より個に応じた指導が</p>
--	---

平成 15 年 度	<p>でき、基礎・基本が身につく、進んで学ぶ子が育つであろう。</p> <p><国語科の研究仮説> 書くことの領域において、児童の実態に応じたきめ細かな指導をすれば、基礎・基本が身につく、進んで自分の考えを表現できるであろう。</p> <p>○研究の内容・方法</p> <p><算数科>・習熟度別少人数年間指導計画の修正 ・自己評価の項目を少人数年間指導計画に書き込む。 ・評価を生かした授業研究を通して、授業の改善をしていく。</p> <p><国語科>・少人数指導に適した学習形態と指導方法を考える。 ・書くことの基礎・基本表を作成し、身につけさせたい事柄を明らかにする。 ・全学年が授業研究をし、仮説の検証をする。</p>
--------------------	---

平成 16 年 度	<p>○ テーマ 自ら問題意識を持ち、進んで学ぼうとする子をめざして 一少人数指導による基礎・基本の定着を通して—</p> <p>○<算数科の研究仮説> 学習の振り返りをする場や方法を工夫すれば、より個に応じた指導ができ、基礎・基本が身につく、進んで学ぶ子が育つであろう。</p> <p><国語科の研究仮説> 書くことの領域において、児童の実態に応じたきめ細かな指導をすれば、基礎・基本が身につく、進んで自分の考えを表現できるであろう。</p> <p>○研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業研究と少人数指導のカリキュラムと指導体制の確立 ・3カ年での達成状況の把握（まとめ）と 次年度以降にむけた課題の把握
--------------------	--

(3) 研究推進体制



III 平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<算数科>

- ・授業の中盤に自己評価する場を設けたことで、次の課題に取り組む姿勢が意欲的になり、子どもたちが集中して取り組めるようになった。
- ・授業の中盤で評価をすることにより、個に応じた適切な支援ができた。
- ・単元の最後の自己評価(自由記述)によって、教師が支援の仕方を振り返ることができ、足りない部分を補ったり、理解していることをさらに深めさせたりすることができた。子どもがさらなる意欲化を図ることができた。
- ・習熟度別にグループ分けする時には、ヒントの少ないコースを選ぶ子が増えた。自分で課題を解決しようとする姿に変わりつつある。

<国語科>

- ・教師の指導の目標や評価基準をはっきりとし、目標に即した指導ができた。
- ・児童の実態と目標に照らし合わせたワークシートを作成することは、児童のきめ細かな支援につながり、何を書いたらよいか、何をしたらよいかをはっきりわかり、児童は、進んで書く活動に取り組むことができた。
- ・評価基準をはっきりさせることは、求める児童の姿もはっきりしてくる。児童の実態に合わせたワークシートを何種類か用意することができ、どの子も自分でできたという達成感を感じることができた。
- ・興味・関心が持続できるような題材を選ばせるようにした。一人一人に書く内容を選ばせたことで、最後まで書き終え、満足感を味わうことができた。また相手を意識して作文を書いたことで、読んでもらえる喜びを味わうことができた。
- ・習熟度別や進度別で指導することにより、個別指導が行き届き、児童もじっくりと集中して書くことに取り組むことができた。
- ・日常の取り組みとして、書く機会を増やす、書くことを億劫がらないように日記や他の教科の授業の中などで取り組んできた。少しずつだが、自分の考えを自分の言葉で書ける児童が増えてきつつある。

2. 今後の課題

<算数科>

- ・考えたり教え合ったり、また考える過程を振り返る時間を検討していきたい。
- ・下位の子にとっては、もっと細かい形成的評価が必要である。
- ・下位のグループには時数を多くしたり、上位のグループには発展的な課題を与えたりというように、習熟度別指導計画の修正をしていく。
- ・領域によっては、評価の場面や内容の検討が必要である。

<国語科>

- ・児童の意識調査だけでなく、能力的な分析も必要である。児童の実態を正確につかむための調査方法を探り、確実な基礎・基本の定着のための指導に生かしていきたい。
- ・書くことへの抵抗をなくすために、ふだんから教師や児童の言語環境を整えていく必要がある。

IV 学力等把握のための学校としての取組

- 単元、評価テスト、県学力検査
- 習熟度別による評価・観察
- 授業中の自己評価カードにより児童のつまづきを把握し、指導に当たる。
- 朝自習の100マス計算、漢字テスト
- 学期に1~2回、チャレンジ学習として今までの学習の復習
- 学期に2回、学年オープンの計算チャレンジ

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 保護者への理解を深めるための授業公開
- アンケートの実施(児童・保護者)
- 指定校同士の交流・授業公開
- 学校だよりへの掲載

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T. Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無